

タイ語の文法

タイ語の基本語順は SVO で英語に似ている。ただし、目的語の位置には、動作の対象だけでなく、「チェンマイ(に)行く」「バス(で)行く」のように、目的地や手段を表す名詞も、前置詞「に」「で」を使わずに現れる。

pay chian-may (行く+チェンマイ)「チェンマイに行く」
pay rot-mee (行く+バス)「バスで行く」

また、この例の「主語」のように、会話では話し手と聞き手の間で了解されていることをいちいち表現せず、「省略」する。これは日本語にも共通する原則である。

タイ語では、SVOO の構文に現れる動詞は、「与える」「教える」など、ごく少数の動詞に限られており、「行く」は目的語を 2 つとることはできない。

それでは上記の例文をまとめて、「バスでチェンマイに行く」(to go to Chiang Mai by bus) は、どう言えばよいだろうか。英語の by のように、述語動詞と名詞の関係を表す前置詞 dooy「～によって」を使うこともあるが、自然なタイ語らしい表現では次のようになる。

nan rot-mee pay chian-may
(座る+バス+行く+チェンマイ)
＝「バスに座り(＝バスで)チェンマイに行く」

この例では、「バスに座る」(＝バスに乗る)動作が、続く「チェンマイに行く」動作のための手段を表している。この「バスに座って」＝「バスで」のように言い換える発想は、日本人には理解しやすいだろう。このように動詞

句(目的語名詞を伴うこともある)がいくつも続く構造をタイ語文法では「動詞連続(V+V+V+...)」と呼ぶ。これは日本語の複合動詞と比べることもできるが、日本語では最後の動詞だけが終止形、他は連用形となる。また英語の文では複数の動詞が一つの文(節)に存在する場合、その一つだけが定形となり、他は不定詞、動名詞、分詞形のいずれかを取らねばならない。一方タイ語では語形変化のない動詞が、理論的には無制限に続くのである。

次の例も動詞連続の一種である。rew「速い」は、タイ語では状態動詞と分類される。状態動詞は動作動詞の直後に現れる場合、動作の有り様を表す。英語であれば、副詞「速く」が述語動詞を修飾するが、タイ語では「走る」と「速い」という結果となる、という表現になる。

win rew (走る+速い)「速く走る」

この文の否定文は、「走る」と「速い」のどちらの動詞を否定するかによって、意味が異なってくる。

may win rew (否定辞+走る+速い)「わざと遅く走る」
win may rew (走る+否定辞+速い)「走っても速くない」
つまり、やる気がないなら前者、やってもダメなら後者を使う。このように、タイ語は英語に似ていると油断すると、落とし穴が待っている。英語だけでなく、タイ語に挑戦してみたいかだろうか。

表紙写真 について

トナカイ牧夫の子どもたち

大石侑香 Oishi Yuka (日本学術振興会特別研究員 PD)

ハンティは約 40 のシベリア北方少数民族のひとつであり、北西シベリアに約 3 万人が住む。ソ連時代の集団化以降、定住村に住む者も増えたが、現在もタイガの森の中で狩猟・採集・漁撈・トナカイ牧畜を営んでいる者も多い。今年の 3 月に私はシベリアのヤマル-ネnetz自治管区のトナカイ牧畜キャンプにて文化人類学調査を行った。

トナカイ牧夫はシベリアの広大な大地をトナカイにそを曳かせ、年間を通して移動して暮らす。今回お世話になった家族は写真(右下)のよ

うな毛皮の天幕に住み、1400 頭のトナカイとともに、冬には西シベリア低地の村の近くに宿営し、夏にはウラル山脈を越えたところまで行き、また同じルートで村の方に帰る。その移動距離は年間 400km にもなる。冬は-40 度以下になり、もちろん電気・ガス・水道・インターネットはない。薪で暖をとり、灯油ランプで明かりをとる。食糧は飼育しているトナカイの肉とパン。大自然の中をまさに「旅を住処」として

いる逞しい人々だ。

そうした生活を送る牧夫の子ども

たちは親元を離れ、普段は定住村にある寄宿生学校で学んでいる。しかし、子どもたちは夏休みとなる 4 月下旬から 9 月下旬まで親の遊牧について行く。写真(左上)は、徐々に家族みんなで食卓を囲んだ楽しいひとときのものである。

これから夏休みの終わりまで、子ども達は親の仕事をよく手伝い、遊牧生活を学んで過ごす。ウラル山脈の西側の宿営地に子どもたちを学校に送るヘリコプターが現れるまで。

